

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	子育て世代の外国人に寄り添う地域日本語教育の必要性：多文化コミュニティの創出を目指した広島県東広島市での実践を通して
Author(s)	菅川, 裕希; 小口, 悠紀子
Citation	広島大学日本語教育研究, 34 : 21 - 28
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/55088">10.15027/55088</a>
URL	<a href="https://doi.org/10.15027/55088">https://doi.org/10.15027/55088</a>
Right	Copyright (c) 2024 広島大学大学院人間社会科学研究科日本語教育学プログラム
Relation	



# 子育て世代の外国人に寄り添う地域日本語教育の必要性 —多文化コミュニティの創出を目指した広島県東広島市での実践を通して—

菅川裕希・小口悠紀子

The Need for Local Japanese Language Education to be Close to Foreigners Raising Children : Practice of Creating a Multicultural Community in Higashi-hiroshima City.

Yuki SUGEKAWA・Yukiko KOGUCHI

キーワード：多文化共生 地域日本語教育 コミュニティ 社会参加

## 1. はじめに

### 1.1. 本稿の目的

文化庁の文化審議会国語分科会が2021年10月に公開した「日本語教育の参照枠」では、言語教育観の柱として、「日本語学習者を社会的存在として捉える」という文言が掲げられている。これは、学習者を単に言語を学ぶ者としてではなく、新たに学んだ言語を用いて社会に参加し、より良い人生を歩もうとする存在として捉えることである。この考えに基づく、学習者にとっての日本語習得は、それ自身が目的ではなく、より深く社会に参加し、より多くの場面で自分らしさを発揮できるようになるための手段である（下線は筆者）とされる。

しかし、来日した外国人が地域の日本語教室で日本語を学べばすぐに社会とつながれるか、とさえそうではない。たとえば、地域の祭りで留学生が踊る実践を試みた島崎（2021）において、インタビューを受けた留学生は、留学先である仙台での暮らしを「馴染みのない孤立したシャボン玉の中に住んでいるよう」と表現している。留学生のように日本になんらかの所属機関を持つことでさえもそう感じるのであれば、家族の都合で来日した外国人、特に幼少の子どもを抱える外国人にとって、社会に参加するという事はなお困難が伴うことが予想できよう。

そこで、本稿では、広島県東広島市において、日本人と外国人が協働で活動できる場を創ることを目的に筆者（筆頭）らが立ち上げた多文化コミュニティ“たぶんかひろば pazuru”の実践について報告する。その上で、参加者へのインタビューを通して、多文化コミュニティが多文化共生社会を見据えてどのような貢献ができるかについて探る。

## 2. 実践の背景—なぜ今この実践なのか—

### 2.1. 地域日本語教育システムとその課題

近年、日本では外国人住民の数が増えつつあり、多様な言語的・文化的背景を持つ人々と共生する社会の実現が課題となっている。多文化共生は「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社

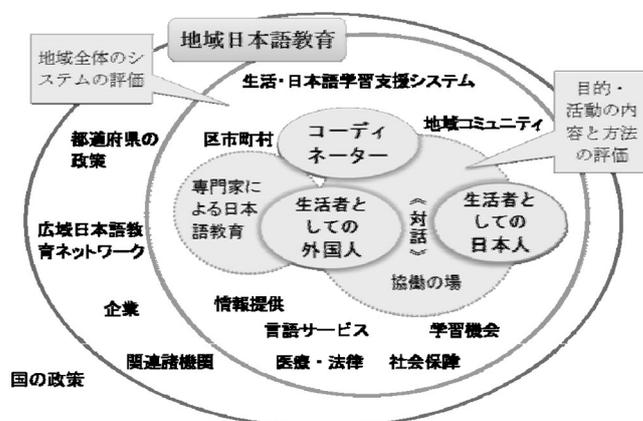


図1 地域日本語教育システム（日本語教育学会編 2008）

会の構成員として共に生きていくこと」（総務省2006）と定義される。この中で、地域日本語教育は、地域社会を基盤としたボランティアや行政を中心に展開されてきた。日本語教育学会（2009）は、「日本語を教える／学ぶための教室」の範囲を超え、全ての人によりよく生きる社会の実現のために、それを妨げる問題を問い、日本語コミュニケーションの側面からの働きかけによって多文化共生の地域社会を目指す活動や制度、ネットワークなどの総体」として、地域日本語教育システム（図1）を提案している。これによると、地域日本語教育は、外国人が生活していくための日本語能力を最低限保障する「専門家による日本語教育」と、生活者としての外国人・日本人が、相互理解を深め、人間関係を築きながら、双方がコミュニケーションの力をつける「対話を重視した協働の場」の2つの役割を担っているとされている。

しかし、御館（2019）は、日本語の学習機会が在日外国人等に十分にいきわたっていないことを指摘している。特に、幼少の子どもを抱える外国人女性たちは就業・就学の機会が限られており、社会とのつながりや育児や子どもの就学に関する情報を得るために日本語を必要としても、学習機関・機会に

参加することも難しく孤立しやすい状況にある（本間 2013）。たとえ日本語学習の機会を得たとしても、日本語習得には母語や学習環境、動機など個人差が大きく、いずれにしても時間がかかり、生活に必要な情報を得て理解することは容易ではない。行政からの情報は多言語化が進んでいるが、すべての外国人住民の言語に対応することは難しい。

松尾（2012）では、日本社会では「可視化されない日本文化の実践を通して暗黙の了解の形で享受」され、「意識にのぼらない日本人の経験、価値、生活様式は、外国人にも当然のこととして同様に適用される」と述べる。特に、育児・就学に関する情報は、学校のルールや規範だけでなく、日本で生まれ育った者の間で共有されている「暗黙の了解」としてのルールや常識を含む場合がある。さらに、子どもが安心して学校生活を送ったり、不利益を被らないようにしたりするためには、地域住民との人間関係や積極的なコミュニケーションが助けになる可能性もある。こうした実態を鑑みると、日本語の学習機会の確保だけでなく、それと同時に、日本人と外国人が同じ地域社会で生活しながら関わる場がほとんどない現状を変えていくことが喫緊の課題である。

## 2.2. 広島県東広島市における地域日本語教育

本稿で実践の対象とした地域は、広島県東広島市である。市のホームページで公開されているデータによると、2023年9月時点で、東広島市の総人口190,386人のうち、外国人市民数は8,507人であり総人口に占める外国人市民の割合は4.47%であると報告されている。外国人市民の国籍は中国27.3%、次いでベトナム19.6%、フィリピン6.3%、韓国4.8%、インドネシア4.8%となっており、在留資格は永住者24.4%、留学20.8%、技能実習19.5%、家族滞在が7.9%となっている。4つの大学（広島大学、広島国際大学、近畿大学工学部、エリザベト音楽大学）が存在し、現在は永住者が最も多く、短期滞在ではなく、長期滞在の外国人住民が増えている。

市が主催する国際理解や日本人と外国人の交流を目的としたイベントとしては、1年に1度国際フェスタが開催されている。国際フェスタは、市民が国籍を問わず、ボランティアスタッフとして、または出店者として活動できる仕組みを有している。また、当日までに自治体が主導のミーティングを数回開き、ボランティアスタッフ同士がイベントを共に実施するという共通の目的を持ちながら運営することで市民の協働を促している。加えて、市からの委託事業として、国・地域の理解講座や料理教室が年に数回、開かれることもある。また、住民自治協議会によっては、地域住民らが外国人住民にも声をかけて夏祭りや「やさしい日本語」講座等の実施を試みているところもある。

地域の外国人住民に向けた日本語学習の機会とし

ては、まず行政からの委託で提供されているものとして①日本語教育の専門家による日本語教室、②市民との対話型の日本語教室、③一対一で行う市民パートナーとの対話型レッスンがある。また、日本語教育学専攻を持つ広島大学内で開講されているものとして④専門家を目指す大学生や大学院生による日本語教室、⑤専門家を目指す大学生や大学院生による広島大学に通う留学生や研究者とその家族のための日本語教室がある。概要を表1にまとめ、詳細を以下に述べる。

①は、市の中心部において、日本語教室を週2回（平日夜、週末午前）、漢字の教室を週1回（週末午後）に実施している。日本語教室は3つのレベルからなり、全15回のコースで、春と秋に開講される。生活場面を中心とする1回完結型のテキストを使用している。②はおしゃべりによる対話型の教室である。近年は、外国人の散住地域にも教室の設置を広め、全4箇所週1~2回（平日夜、または、休日の午前・午後）実施している。①と②には、登録した日本人住民がボランティアとして参加することができ、会話練習や日本語学習のサポートをしている。③は、日本人ボランティアと日本語学習者が一対一で、日本語で対話するというものである。登録者のマッチングが行われた後、都合のいい時間帯に会って対話をする形を取る。④は、日本語教育を専攻とする大学生・大学院生が中心になり運営・開講している。週2回（平日夜）に、入門、初級、中級、上級の4つのレベルで開講されており、受講料は無料である。対象者は留学生に限らず、地域で暮らす日本語学習をしたい人は誰でも参加できる。⑤は、広島大学に在籍する留学生や外国人研究者とその家族を対象に大学内に設置された日本語教室で、週2回（平日午後）に入門と初級の2つのクラスが開講されている。

表1. 日本語教室の概要（2023年度）

	開催時間	日本語教師の資格	形態	授業料参加料	子連れ参加
①	平日夜 週末午前 週末午後	必要	教室型	有料 15回 2000円	応相談
②	平日夜 週末午前 週末午後	不要 ボランティア	対話型	無料	応相談
③	随時	不要 ボランティア	対話型 1対1	無料	応相談
④	平日夜	不要 ボランティア	教室型	無料	応相談
⑤	平日午後	日本語教育を専攻する者	教室型	無料	不可

表1の教室型の日本語教室では、ごみ分別や防災のトピックを取り入れ、消防署などの担当者から話を聞くなどの機会を設けている場合もある。また、市では、教室に参加する日本人ボランティアを増やすことを目的に、日本人住民を対象としたボランティア養成講座も実施している。その他、外国人日本語スピーチコンテスト、新年交流会、外国人相談窓

口、多言語広報サービスなどが実施されている。

以上のように、東広島市の地域日本語教育は、コーディネーターを中心に、社会生活を支えるための「専門家による日本語教育」と生活者の外国人と日本人が対話を通して、相互理解を深め、人間関係を構築しながら、コミュニケーション能力を向上させる場として設計されていると言える。また、同じ市内にある広島大学に日本語教員養成コースがあることから、日本語教員を目指す大学生・大学院生らも日本語教室を開講しており、地域住民の日本語学習や運用の場を提供していると言える。

しかし、教室が開講される時間帯は、平日の夜、週末午前が中心であり、留学生や就労者にとっては受講しやすい反面、幼少の子どもを抱える外国人女性にとっては教室へ通うことが容易ではない。また、子どもを同伴しての受講は、受講者の人数や子供の年齢などに応じて柔軟に対応するとされるが、ホームページでの案内や託児サービスの設置など、積極的な受け入れは行われていないようである。

すなわち、本間（2013）が述べるように、幼少の子どもを抱える外国人女性たちが、社会とのつながりや育児や子どもの就学に関する情報を得るために日本語を必要としても、学習機関・機会に参加することも難しく孤立しやすい状況にあることが懸念される。

こうした課題から、現状の日本語教室にアクセスできない外国人でも参加でき、国籍や言語能力にかかわらず子どもも大人も交流ができる多文化コミュニティの必要性を感じた筆者（筆頭）らは、「たぶんかひろば pazuru」を立ち上げた。以下にその活動について報告し、参加者の参加動機と学びという観点から、このような活動を行うことの意義と今後の課題について考察する。

### 3. 実践のフィールドと概要について

#### 3.1. 「たぶんかひろば pazuru」の概要

ここからは、本稿で対象とする実践である多文化コミュニティ「たぶんかひろば pazuru」について概要を述べる。

「たぶんかひろば pazuru」は2022年9月に筆者（筆頭）を含む日本人3名で立ち上げた市民団体である。その後、運営側として外国人2名が加わり、2023年2月現在、合計5名で運営している。主な活動は毎月1回のイベントの企画・実施である。

活動の目的は、地域住民である日本人・外国人が交流を通して、

- (1) 生活、子育てや教育などの情報が得られる
- (2) コミュニケーションの力を向上させる
- (3) 地域参加へつなげる

ことである。イベントについては、2022年9月から1年間で行った内容を表2に示す。イベントは、初年度であることと参加者のニーズを想定し、(1) 情報獲得のためのおしゃべりカフェ、(2) 相互理解のための「お隣さんは〇〇人」、(3) 子連れでも楽しめるピクニックを3つの柱として組み立てている（写真1, 2）。

年間のイベントのうち、「学校について話そう」（2月）、「みんなで遊ぼう」（8月）は運営メンバー主導のイベントであり、外国人が日本の学校制度やルールに関する理解を深め、小学生の子どもを持つ先輩保護者から経験を聞いたりする場や、遊びを通じて pazuru や地域の人のつながりを作る場を提供することを目的としている。一方、「お隣さんは〇〇人」（12月、7月）、ヨガ（1月）、シリアのお菓子作り（6月）は参加者主導型のイベントであり、参加者によるお国紹介や趣味や特技を活かし、他の参加者と共有することで、相互理解を深め、お互いの多様性を尊重する場となるよう企画した。また、応急処置対応講座（5月）や「うどんを作ろう」（9月）は、地域の消防士やうどん作りを趣味とする人を招き、地域社会とのつながりを築くことを考慮している。特に、応急処置対応講座は、東広島市で主に日本人が受講する講座として開催されているものであるが、子どもの誤飲や救急時の対処法に関する情報は、子育て中の外国籍住民にとっても有益な情報であるため、異なる背景を持つ参加者が共に学ぶ機会として取り入れた。

表2. 「たぶんかひろば pazuru」の年間活動

9月	初回おしゃべりカフェ
10月	おしゃべりカフェ
11月	ピクニック シリアのコーヒー
12月	お隣さんはシリア人(ヒジャブ体験) 【参加者主導】
1月	インド人によるヨガ 【参加者主導】
2月	学校のことを話そう(市役所、教育委員会の説明有)
3月	
4月	ピクニック(日本・シリアのあそび)
5月	消防士による応急処置対応講座【地域の人に学ぶ】
6月	シリアのお菓子を作ろう 【参加者主導】
7月	お隣さんはインドネシア人 【参加者主導】
8月	一緒に遊ぼう with子ども支援の団体
9月	うどんを作ろう 【地域の人に学ぶ】
10月	ピクニック

写真1, 2. 子連れで参加し情報共有する参加者たち



イベントにおいて参加者が「対等な関係を築く」ことを重視し、参加者に中心的な役割を担ってもらいながら、固定された役割や立場を避け、相互に学び合う機会となるように心掛けている。また、参加

者が新たな発見を得られる有益な内容に焦点を当て、対話が自然に生まれるようにイベントをデザインしている。年間計画は運営メンバーが考えているが、イベントの中で参加者の興味や関心、ニーズを把握するよう努め、イベント内容を柔軟に変更できるようにしている。子連れ参加者もいるため、おもちゃや本、折り紙などを準備し遊ぶスペースを作るなど、できるかぎりの配慮を行っている。

### 3.2. 参加者

「たぶんかひろば pazuru」のイベントは、言語、国籍、属性や年齢を問わず、誰でも参加できるものである。イベントの参加者募集は、レストランやスーパーなど人が集まる場所へのポスターの掲示、SNS などを通して、広く行った。2 回目以降は、これまでに参加した参加者が友人を連れて参加するなど、新たな参加者が口コミでも広がっていった。イベントによって事前申し込みが必要な場合もあるが、できるだけ当日参加を可能にすることで小さい子供連れの方が参加しやすいように工夫した。

参加者の国籍は延べ 13 カ国に及ぶ（日本・シリア・エジプト・アルジェリア・イギリス・アメリカ・ベトナム・インドネシア・ウズベキスタン・中国・インド・アゼルバイジャン・フィリピン）。夏休みのイベントを除いて、各イベントの参加者は大体 15 組ほどで、外国人と日本人の内訳はほぼ半々である。大部分は女性で、乳幼児と共に参加する人もおり、大体 5、6 人の子どもが集まる。イベントでは、日本語と英語が主に話されており、他の外国人参加者の母語も交えながらコミュニケーションが行われている。

### 4. 調査概要

多文化コミュニティ「たぶんかひろば pazuru」の活動意義や今後の可能性を探ることを目的に、外国人参加者 3 名、日本人参加者 3 名を対象（表 3）に、個別に半構造化インタビューを実施した。

表 3. 調査協力者の概要

	A	B	C
来日時期	2014年2月	2022年7月	2023年5月
来日理由	父親の仕事、国の情勢悪化	夫の留学に家族で帯同	結婚
日本語学習歴	地域日本語教室受講 ・2014年7月～4か月 ・2015年再開後8か月継続。結婚後、トルコへ移住。 ・2017年再来日語（4か月） ・2019年「ムスリム女性のための日本語教室」（1年半）	オンラインレッスン受講（母国6か月、日本3か月） 地域日本語教室受講（2023年4月～）	本やyoutubeで独学。 地域日本語教室受講（2023年10月～）
子ども	2人（7歳、3歳）	1人（10代）	なし
イベント参加	2022年9月～毎回	2023年4月～毎回	2023年6月～（2回）
言語	英語、日本語、アラビア語	英語、インドネシア語	英語、イタリア語、ベンガル語
仕事	主婦	主婦、アルバイト	主婦

	D	E	F
地域	隣町に在住	東広島市2017年～	東広島市2021年4月～
背景	・卒業後、英語を学習する中で外国の文化にも興味を持つ ・住んでいる地域には外国人が住んでいるが、全く交流がない	・外国人が多い地域で育つ ・留学経験がある ・留学生在が全学生の半分を占める大学で学び、留学生とシェアハウスで生活 ・多文化交流イベントを主催	・国際交流に興味があり、学生時代外国人の友人が多かった ・旅行会社で海外添乗員を経験 ・国際交流、英語を通して子育て中の外国人、日本人をつなぐイベントを主催
子ども	なし	2人（4歳、2歳）	3人（9歳、5歳、1歳）
イベント参加	2022年12月～毎回	2023年8月～（2回）	2022年11月～毎回
言語	日本語	日本語、韓国語	日本語、英語

インタビューは 2023 年 9 月に実施した。まず、調査協力者の背景（在日時期や日本語学習の経験、使用言語）について質問した。その後、（1）たぶんかひろば pazuru を知ったきっかけや参加動機、（2）イベントに参加した感想、（3）イベント参加により得られたもの、（4）たぶんかひろば pazuru がどのような場所になっているか、について尋ね、調査者の返答に応じて追加で質問を行った。外国人に対しては、日本語と英語を交えてインタビューを行い、許可を得て録音した。調査協力者の概要は表 2 の通りである。A～C は外国人参加者、D～F は日本人参加者である。なお、調査協力者は様々な回答を得るために、国籍、在日時期などが異なる参加者に依頼した。

### 5. 結果と考察

本章では、調査協力者に行ったインタビューの回答から、たぶんかひろば pazuru のイベントへの参加動機、参加から得られたもの、参加の意義について述べる。

#### 5.1. 外国人参加者の参加動機と学び

##### 5.1.1. 外国人参加者 A

A は父親が日本で仕事をしていることやAの出身国の情勢を理由に約 9 年半前に来日した。自治体による教室型の日本語教室に約 1 年、「ムスリム女性のための日本語教室」に約 1 年半通い、日本語レベルは N4 程度である。A は現在運営メンバーの一員として、イベントに継続的に参加している。

A は、参加動機について、日本語で話すことができ、生活に関する新しい情報や日本語表現や言葉が学べるのでおもしろいと述べる。

A は継続的な日本語学習を希望しており、学習意欲は高い。しかし、現在 7 歳と 3 歳の 2 人の子どもを育てているため、日本語教室の時間帯に通うことが難しく、他の教室も見つけられずにいる。日常生活では、日本語を使用する場面は非常に少ないようだ。イベントに参加する前は、「日本語で話すことが恥ずかしかったし、自信がなかったが、今は自信が持てるようになった」と語る。

A にとって、たぶんかひろば pazuru は日本語を学ぶ場であり、日本語の使用経験を積むことで、自信をつけ、学習動機を高めていることがわかる。

「どのような日本語を学習できたか」という質問に対して、様々なイベントを振り返って「以前は料理の言葉など聞いてもわからないことが多かったが、今は聞いてわかる」と料理に関する日本語を挙げている。イベントで一緒に昼食をとる中で、お弁当を見せ合ったり、料理を分け合ったりする機会が多い。自然と料理についての話が始まり、料理に関する日本語の学習につながっていると考えられる。しかし、Aは「日本語を勉強したい。イベントの前に日本語のレッスンをしてほしい」と、より体系的な指導や学習を求めている。これは、Aが長期滞在者であり、今後も日本で生活することが見込まれているからかもしれない。

また、「新しいことを知ったり、友だちに会えることで、気分転換、元気になる」と述べていることから、1か月に1回のイベントが居場所にもなっていることが窺える。

### 5.1.2. 外国人参加者 B

Bは、夫の留学を機に、1年2か月前に子ども(10代)と共に来日した。来日前に6か月間オンラインで日本語を学習し、日本語で簡単な自己紹介ができる。来日後は体調不良により、入院や自宅療養を余儀なくされたため、3か月間オンライン学習を継続した。その後、2023年4月(来日9か月の時)から自治体による教室型の日本語教室に通い始めると同時に、たぶんかひろば pazuru のイベントにも参加するようになった。

Bは参加動機について「同国人のコミュニティがあるが、大学での研究や仕事で忙しく一緒に出かける新しい友だちがいない」「家族も友だちもいないので、新しい生活を楽しむために友だちが必要と思い参加した」と述べる。しかし、Bは自身のことを「内向的な性格なので、一人でイベントに参加するタイプではない」とも述べる。Bの夫もBが一人でイベントに参加すると言うと、驚いたそうだ。

一方、Bは参加する教室型の日本語教室においても、交友関係が広がり、自宅に招待されたことがあるという。そこで、「日本語教室の日本人ボランティアとも友だちになれたか」と質問したところ、実際は、日本人ボランティア3名が学習サポート役をしているにもかかわらず、Bは「クラスには日本人ボランティアはいない」「教室に先生は4人いる」と答えた。つまり、Bは日本語教室にいる母語話者は全員が「先生」であり、友だちになる対象ではないと認識していたのである。これまでの地域日本語教育に関する議論において、教室で生じる「先生一学習者」や「教える一教わる」といった非対称的な関係が疑問視されて久しい(森本・服部 2006)。Bの語りからは、日本語教室にボランティアに携わってもらえば、日本語学習に加えて、市民同士の関係性が生まれて社会参加につながるというような単純な話ではなく、そこが日本語学習を目的とした場である以上、必然的に非対称的な関係が生じてしまう可能性を示している。

イベントを通じた学びについて、Bは様々な文化

背景を持つ人と対話することにより「人と出会い、友だちになる、その人たちの文化、世界には様々な人がいる、ということを知っている」と述べる。イスラム教で「Hablum minannas (هَبِّ لَمْ مِنَ النَّاسِ)」という言葉があり、様々な人と出会い、この考え方を実感した」ようである。この言葉は「人は他の人や人々と積極的に良好な関係を維持することの重要性を強調する概念」であり、「他者への善意や共感、協力の意味を持ち、人間関係を大切にし、社会的な調和を築くことの大切さ」を意味する。また、「私たちの文化は違うけど、同じことを一緒に楽しめる」と語る。

Bは継続的にイベントに参加する中で、多様な人との出会いを楽しみ、人と繋がりを持つことの大切さを実感しているようであった。

### 5.1.3. 外国人参加者 C

Cは、結婚を機に来日し、現在4か月である。生まれてから小学校入学前まで、小学校から高校まで、大学から就職と3カ国を移動してきた背景を持つ。独学で日本語を学習し、ひらがな・カタカナは読み書きができるが、日本語でのコミュニケーションはほとんどできない。来日してすぐ、自治体による教室型の日本語教室に申し込むが、コースの半分が終了しており、また交流型の教室は日本語が入門レベルのため参加を断念し、秋からの受講を待っている状態である。

Cはインターネットで人と交流できる場所を探すが、日本語で書いてあるものも多く、見つからなかった。来日して2、3週間の時、「インドネシア料理のレストランでたぶんかひろば pazuru のポスターを見つけた。国籍や日本語レベルに関係なく参加できると書いてあるから、英語が話せる人が1人はいるだろう。新しい人に会ったり、友だちを作ったりしたいと思い、イベントに参加した」と述べる。インタビュー時、イベント参加は2回のみであったが、「ハラルショップや日本語のオンラインレッスン、オンラインでの市役所への連絡方法などの地域の情報を他の参加者から得ることができて、とても役に立った」、「たぶんかひろば pazuru のイベントで国際交流グループを作っている日本人参加者に出会い、(そのグループを紹介してもらったので)今度参加しようかと考えている」と述べる。

来日後、言語の壁が新しい環境での社会参加を制限する要因となっていたが、イベントに参加したことにより地域や生活に関する情報不足を解決したり、たぶんかひろば pazuru の外へも交流を広げるきっかけになっている。

また、日本語に関しては「YouTube を見たり、本を読んだり、毎日30分~1時間勉強している。しかし、イベントで日常生活で使われる日本語を聞き、会話しているのを見るのはとてもいい。私も何か日本語を使う練習にもなっている」と、日本語、特にリスニング力が鍛えられていると実感している。

たぶんかひろば pazuru に期待することは「もっ

と色々な人と交流したり、新しいことを学ぶ」ことだそうだが、「毎月のイベントをととても楽しみにしている。毎回、様々なことに焦点を当てた内容で、新しいことを学べるということがもつといい。ただ単に座って話すだけではなく、何かをしながら話すことがとてもいい」と評価する。ふるさとの話をしたいとお願いすると、快く引き受けてくれた。「たぶんかひろば pazuru」は日本語を中心としない活動であるため、日本語ができないCにも参加しやすく、活躍する場を提供できる。英語でコミュニケーションすることは、Cが相手の理解を配慮しながら話すスキルの向上だけでなく、同時に日本人が外国人の立場を理解する契機となる。つまり、異なる立場を経験することによって、実践的にコミュニケーション方法を学ぶ機会が提供されると考えられる。

## 5.2. 日本人参加者の参加動機と学び

### 5.2.1. 日本人参加者 D

Dは東広島市の隣町に住んでおり、外国人と出会う機会がないと言う。英語を学習できる場所を探している時に、インスタグラムで「たぶんかひろば pazuru」を見つけたそう。身近ではないシリアという国に興味を持ち、「お隣さんはシリア人」(12月)のイベントに初めて参加した。

初めて参加した時のことについて、Dは「日本語が話せる外国人もいたので、安心した。英語だけだったら、躊躇していたかもしれないけど、通訳を通してコミュニケーションが取れるので、よかった」と述べており、日本語や英語が話せる人を介してコミュニケーションができるということが、参加に対する安心感を与えていることが分かる。外国人との交流において、言葉の壁は日本人側も感じており、その壁が少しでも低いことで次の交流の場への参加につながると考えられる。その後、Dは継続的な交流を通して英語学習へのモチベーションが向上したと言う。

一方で、「外国人と話す時、日本語にあまり気をつけていなくて、ジェスチャーで話そうと思っていたけど、「やさしい日本語」の方法を学んでから、日本語を工夫しよう意識し、その方法を知っているので使うようにした」と述べている。実際に、「病院で外国人参加者に会って話しかけた。やさしい日本語を思い出して、気をつけて話した」そう。 「やさしい日本語」について学んだことで、コミュニケーションの方法を変化させ、相手に配慮した話し方を工夫する様子が窺える。そして、積極的にコミュニケーションを取る姿勢へと変化を見せている。これらのコミュニケーションの試行錯誤、工夫はDの知らない国に対する探求心や出会った外国人に対してもっと理解したいという感情が背景にあったからであると考えられる。

イベントの参加について、Dは「知らないことを知るのが楽しかった。新鮮だった。色々な国のことをもっと知りたいなって思った」「仲良くなったみんなに会いたいと思う」と述べ、新しい学びや仲

間との交流を楽しんでいることが分かる。しかし、「自分が話せること・教えられることがないから、いてもいいのかと思うことがある」と、「たぶんかひろば pazuru」で果たすべき役割に不安を感じている。その背景には、イベントの運営方法が影響している可能性が考えられる。参加者主導のイベントでは参加者が中心となり、国について話したり、特技を活かして参加者に教えたりするため、Dにイベントで何かしなければならぬというプレッシャーを与えている可能性がある。

しかし、筆者には、DができることをDなりに実行しているように映る。Dは外国人参加者と自身の関係の深まりについて、「関わるのがあまりなく、接点を持ちたくても持てなかった」外国人が「身近な存在になった」と述べる。特に日本語でコミュニケーションが取れる1人の外国人参加者とは会った時に話す機会が多く、イベント以外でも交流を持っている。Dは「知り合ったから、参加したいなと思って参加した。その人の収入になったらという助け合いの気持ちで」その外国人参加者が講師をする料理教室にも参加しており、参加することで役に立とうとしている。Dの「いてもいいのか」という語りは、一見ネガティブに受け取れるが、「仲間」に対する貢献意欲や自己探求の気持ちも含まれていると解釈できる。

### 5.2.2. 日本人参加者 E

Eは外国人を講師として招き、外国料理を通して日本人が外国人と交流する場を作っている。地域子育て支援センターで、たぶんかひろば pazuru の運営メンバーと知り合い、イベントに参加した。

市が開催する外国人支援団体のミーティングで互いの活動について紹介する機会があり、「たぶんかひろば pazuru は外国人を「一市民」と捉え、日本人市民が意識しづらい外国人が抱える課題をイベントに取り入れ、それが社会的意義のある活動」であると述べている。その後、イベントや連絡を取り合ううちに、Eは外国人住民に対する見方を変え、自身の団体の SNS で使用していた「国際交流」を「多文化交流」という表現に変更している。Eが多文化な地域で育ったという背景もあり、「国際交流は日本と外国と言う区別する意味があると思うが、外国人も(私たちと同じ)市民であるという意識や考え方はとても大切であり、理解できる」と理由を述べている。

また、Eは「たぶんかひろば pazuru」を「知り合いの外国人ママに会える場所」と表現している。「一度(外国人参加者の1人の)家にお呼ばれした。外でも会えるけど、連絡を取るのがまめじゃない」と述べている。このように外国人が自宅に招待し、積極的に交流を図っても、職場や子どもの学校など日常的な接点があれば、1回限りで終わってしまうことがある。毎月1回のイベントが、継続的な交流の機会を提供していると考えられる。

うどん作りのイベントでのグループ作業について「多国籍のグループで、協力して作り、食事をする

ことで、自然と対話が生まれ、活動の中で深い話ができたと述べており、協働を通じたコミュニケーションの場となっていたことが分かる。

また、うどん作りについて「(うどんは日本文化だが)日本人でも知らないことが多かったから、純粹にみんなと一緒に楽しめた。教える・学ぶのイベントではない」と述べている。外国人と日本料理を作るイベントでは、外国人に日本料理を「教える」という意識があったのではないだろうか。しかし、実際は「私は日本人であるから日本料理であるうどんについて当然知っていると思ったが、知らなかった」という気づきを得たと解釈できる。その気づきを得たことで、日本人が教え、外国人が学ぶという関係性ではなく、「共に学ぶ」活動になっていたと考えられる。また、改めて日本料理、日本文化に触れることは、自文化について知る機会にもなり、国籍に関係なく参加者が楽しく、学べる内容になり得ると考えられる。

### 5.2.3. 日本人参加者 F

Fは日本人、外国人と一緒に子育てをすることを目的に、ママのための英会話や国際交流イベントを開催している。地域子育て支援センターで運営メンバーと知り合い、Fが主催するイベントに外国人を勧誘するために、たぶんかひろば pazuru のイベントに参加した。その後も新しいつながりを見つけるために、イベントに参加しているが、F自身もイベントを楽しんでいると述べる。

イベントについては、「うどん作りやシリアのおかし作りは普段だったらできない体験だったから、おもしろかった」と述べる。応急処置対応講座は「以前、市が開催する講座に参加したことがあるけれど、イベントは友達と一緒に学ぶのがおもしろかったです。知り合いがいない市のイベントに1人では参加しないかも。誰と何を体験するかが大事だし、特に誰とするかが大事」と述べる。応急処置対応など、知識の獲得が目的となる内容でも、友達と参加することで、学びの体験がより豊かになり、共有できる楽しさがあることを示唆している。

イベントでのコミュニケーションで使用する言語について質問したところ、「(外国人は)日本語を学びたいと思うから日本語で話すけど、難しい人は英語で」と述べ、外国人の学習意欲をサポートする姿勢を持っていることが窺える。

Fはイベント以外での外国人との交流について、「イベントで出会った1人の外国人に自宅に招待されて、仲良くしているけど、他の人(外国人)とは校区がちがうからか、交流はないです。ベビーマッサージのイベントにも誘ったけど来てくれなかったんです」と述べる。親しくなった外国人と実施した国際交流会は、その他の外国人も参加していたが、その後の継続的な参加は限られているようだ。

日常的な接点や共通点、日本人・外国人双方の交流意欲や積極的な働きかけの有無が交流の広がりに影響していると考えられる。つまり、交流の機会を設け、きっかけ作りをしたとしても、外国人の参加

にはつながらない可能性がある。本間(2013)は外国人の母親にとって参加が可能な実践コミュニティの成立の条件の1つとして「日常生活のニーズに対応していること」を挙げている。交流の機会を活かすには、外国人参加者の「声」に耳を傾け、協働で交流の場を作っていくことも必要なのかもしれない。

## 6. まとめと今後の課題

本稿は、広島県にある東広島市の地域日本語教育における課題として、子連れの外国人がまちのコミュニティや社会とつながりを持てる場づくりが重要であることを論じた上で、その試みとして「たぶんかひろば pazuru」の実践についてまとめた。外国人・日本人参加者各3人に実施したインタビュー調査から明らかになったことは以下の3点である。

(1) 外国人参加者らは、日本語で話せる場所、友人づくりのきっかけとなる場所、誰かと話せる場所を求めて参加していた。日本人参加者らは、海外への興味や、外国人とのネットワークづくりを目的として参加していた。こうした参加動機は、継続して参加していくうちに、徐々に変化することもあり、仲良くなった人に会いたい、力になりたい、という気持ちや、団体の理念に共感できるから、という意識へと変わる場合もあった。

(2) 参加者は交流を通して、言葉だけでなく、自文化に対する気づきや意識の変容を経験していた。言葉に関しては、会話の中で日本語の言葉や表現を学び、モチベーションの向上や日本語使用に対する自信、やさしい日本語を使ったコミュニケーションの方法を学んでいたことが分かった。意識に関しては、人とのつながりの大切さや、外国人も一市民であるという捉え方、うどん作りを通じた自文化の自己認識の欠如などに対する気づきや意識の変化が見られた。

(3) 地域で暮らす他の住民と交流したいと思う気持ちがあっても、日本語力や英語力に自信がないことにより躊躇したり、不安を感じたりしている様子が明らかになった。今後、地域社会でイベントなどを行う際には、多様な市民を想定し、日本語や英語があまり話せなくても参加できる活動を取り入れたら、「やさしい日本語」による説明を取り入れるなど、言語的なハードルを下げた活動を創ることで、日本人参加者と外国人参加者両方の参加を促すことができよう。

今後、本実践を継続することで、日本人参加者の中に、外国人も同じまちで暮らす一市民であるという意識が広まることで多文化共生社会の実現に寄与すると考えられる。そして、うどん作りを通じた自文化の自己認識の欠如に気づいたという例にあるように、活動を通して、自分自身や自分の文化に対する理解を深めることで、他者や異文化に対する理解

も深まり、共生社会を推進する一助となる。

また、何より、本実践で行ったように、地域で暮らす住民たちが外国人か日本人かという枠を取り除いて、一緒に美味しい食事を楽しみながら、自然に「おいしいね」や「この料理はどうやって作るの？」などの言葉が出てくる経験を共有することで、言葉や心のコミュニケーションが少しずつ進んでいく。この過程において山野他（2009）が述べるように「信頼が生まれ、異文化理解や他者理解への欲求が生じ、言語の学びへとつながっていく」ことが期待できよう。

最後に今後の課題について述べる。石井（2010）は「日本社会で生活するすべての人が、国籍や言語文化によらず、自分らしく生きていけることを目指した社会形成は、行政側からのトップダウンで推進する制度・環境整備と、共に生活する地域住民が展開するボトムアップの地域社会の人間関係を基盤とした活動とが両輪となって、試行錯誤を繰り返しながら進められるもの」と述べている。しかし、ボトムアップの活動を継続させるためには、活動場所と運営資金の確保が課題となる。例えば、現在利用可能な市のスペースは、フローリングが中心で小さい子供を遊ばせるマットがないこと、子どもが声を出して走り回れるようなスペースが十分とはいえないこと、使用料が高く、参加費で賄えない部分を運営側が自己負担しなければならないことなどがある。子育て世代を対象としたイベントを継続的に実施できる施設や環境の整備、予算の確保などがなされることによって、今後、本実践が継続的に進めること、そして同様の活動が広がっていくことに期待したい。

## 謝辞

本稿執筆にあたり、たぶんかひろば pazuru を立ち上げ、共に活動をしている運営メンバーの皆さんに深く御礼申し上げます。また、pazuru と出会い、時間を共に過ごしてくださっている日本人・外国人参加者、協力者の皆様、そして、インタビューに快諾してくださった皆様に深く感謝いたします。今後も皆さんと共に、新たな可能性を模索し、楽しい時間を共有できることを楽しみにしています。

## 参考文献

- 石井恵理子（2010）「多文化共生社会形成のために日本語教育は何ができるか」『異文化間教育』32, 24-36.
- 御館久里恵（2019）「地域日本語教育に関わる人材の育成」『日本語教育』172,3-17.
- 加賀美常美代（2019）「多文化共生社会に生きる」論文特集「人口減少時代の多文化共生」日立財団 web マガジン『みらい』Vol.3,1-14.
- 神吉宇一（2021）「共生社会を実現するための日本語教育とは」『社会言語科学』24 巻 1 号, 21-36.
- 小口悠紀子（印刷中）「地域住民参加型の防災学習

の必要性」—LEGO®で対話を生み出す実践から—」『日本語教育学会』187, ページ未定.

総務省（2006）「多文化共生の推進に関する研究会報告書」[http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota\\_b5.pdf](http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf)（参照日 2023 年 9 月 23 日）

日本語教育学会（編）（2009）『平成 20 年度文化庁日本語教育研究委託 外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発（「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業）—報告書—』<[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kyoiku/seikatsusha/h20\\_kenkyu\\_kaihatu/pdf/93848601\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/seikatsusha/h20_kenkyu_kaihatu/pdf/93848601_01.pdf)>（参照日 2023 年 9 月 25 日）

東広島市 HP「東広島市における外国人市民の状況」<<https://www.city.higashihiroshima.lg.jp/soshiki/seikatsukankyo/14/2/32851.html>>（参照日 2023 年 10 月 31 日）

本間淳子（2013）「外国人の母親たちにとってのネットワーク活動の意義—十全の参加者としてのアイデンティティ形成過程に即して—」『日本語教育』155,159-174.

文化審議会国語分科会日本語教育小委員会「日本語教育の参照枠」の活用に関するワーキンググループ令和 4 年 1 月 2 8 日

文化庁（2022）「「日本語教育の参照枠」の活用のための手引き」

松尾知明（2012）「日本における多文化教育の構築—教育のユニバーサルデザインに向けて—」『社会科教育研究』No.116.

森本郁代・服部圭子（2006）「地域日本語支援活動の現場と社会をつなぐもの—日本語ボランティアの声から—」植田晃次・山下仁『共生の内実—批判的社会言語学からの問いかけ—』127-155,三元社

野山広・山辺真理子・簀野知紀・河北祐子・宮崎妙子・伊東祐郎（2009）「論考 地域日本語教室の 5 つの機能と研修プログラム:豊かな学びと人間関係づくりを目指して(プレフォーラム 地域日本語教育の過去・現在・未来:その担い手と役割について考える)」『シリーズ多言語・多文化協働実践研究』No.10,60-106.

山本和郎（2001）「コミュニティ心理学の臨床分野への貢献—そしてさらなる展開へ—」『コミュニティ心理学研究』第 5 巻,第 1 号,39-48.

広島大学学生情報の森「もみじ」<https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/international/kazokunihongo.html>（参照日 2023 年 10 月 30 日）